

蔦重・馬琴・写楽・越谷新聞

発行・旧日光街道・越ヶ谷宿を考える会 令和7年1月20日・べらぼう特別号

なんと、べらぼうな～ 今年の大河ドラマが「蔦屋重三郎」だとい
って、何が何でも、蔦重と結び付けて目を引こうとするう～ 蔦重と越谷
に、どんな関係があるってえんだ・・・！？



蔦屋重三郎

ところが～ 武蔵国でも、県庁所在
地そここのけ、新一万円札も物の数で
はない、大々的とはいいにくく、間
接的ではありますが、私たちの越谷
とご縁があるのです。

蔦重の周囲の小説家や絵描きなどのヒトたちとの縁があるのです。他のど
ことも勝るとも劣らない関係が、蔦屋重三郎と越谷の間にあるのです。

蔦重の生まれと育ちは・・・

重三郎は、寛延3年（1750）、吉原で生まれました。父親は丸山重助とい
って尾張^{おわり}の出身、母親は津与^{つよ}で江戸の生まれだといわれています。重三郎の
幼名は「柯理」。その柯理が7歳のときに両親は離婚し、吉原で茶屋「蔦屋」
をしていた親戚の喜多川家に養子として引き取られました。

（茶屋は引手茶屋のこと。吉原に遊びにきた客を妓楼や揚屋に案内する店）
それ以後、安永2年（1773）、彼が23の時に吉原で書店をかまえ、毎年

発行されていた「吉原細見」という吉原案内のガイドブックの卸、小売りを始めたときまでは、何をしていたか、わかっていません。

吉原ガイドブックの「吉原細見」は、吉原の妓楼、揚屋、遊女たちの名前を絵地図のように紹介したもの。享保中期（1725 年以降）から、吉原細見の出版が隆盛となって鱗形屋など 6 軒が競った時期、元文 3 年（1738）以降は鱗形屋と山本九左衛門の 2 者で春秋二回ずつ刊行するときもあり、最後には鱗形屋孫兵衛の独占になってしまいました。重三郎が、どうして、この鱗形屋の系列に入ったのかは、わかりません。

そして、天明 3 年（1783）には、とうとう吉原細見の出版権は鳶屋の独占となってしまいました。

その後、狂歌本、黄表紙、美人画、役者絵・・・などいろんなジャンルの出版に乗り出し、成功をおさめたのです。特に「東洲斎写楽」「喜多川歌麿」の浮世絵ベストセラーの大・大・大成功は鳶屋重三郎の名前を不朽のものとしたのです。

写楽をデビューさせて以後たった 3 年、まだ 48 歳、江戸悪いといわれた「脚気」で死去したのは、大変残念なことでした。



曲亭馬琴

「曲亭馬琴」は・・・・・・・・

滝沢馬琴の方が通っているのかもしれませんが、「滝沢」は本名、「馬琴」はペンネームで、「本名+ペンネーム」となるので、「曲亭馬琴」を使います。

「曲亭馬琴」は「くるわでまこと」と読むのが正しいともいわれ、確かにそ

の方が（くるわのようなところで、誠をつくす男）面白そうではありますが～

馬琴と蔦重との関係は、若かりし時の馬琴が侍階級の最下層であるのがイヤになって、自分で才能があると思っている文筆で世間を渡ってみようと、ハヤリの本屋である蔦屋に原稿の売り込みに行ったのですが、そう簡単には受け入れてもらえず、番頭でなら雇ってやるとか～からかわれて、まあ蔦屋に出入りしていれば、先輩の作家も身近にいるから勉強にもなるかなあと通い始めたうち、先に身を固めた方がいいと言われ、降ってわいた縁談で履物やの娘と結婚したというのが運のツキ。その相手が実は越谷の南荻島出身、母は南荻島、父は岩槻^{すえだ}末田出で、養女に行った履物やの主人も南荻島だったという越谷づくしの関係となりました。

この馬琴の奥さんで、履物やの越谷出身・おかみさん「お百^{ひゃく}」は悪妻の評判が非常に高いのです。先日、封切られた「八犬伝」では寺島しのぶさんが演じられていましたが、これはマアマアで、越谷のイメージダウンになることは避けられたようですが～。なにしろ、後年、馬琴が両目を失明し、その前から書いていた「南総里見八犬伝^{なんそうさとみはっけんでん}」は読者好評で打ち切ることはできない環境のもとで、これまで嫁姑^{よめしゅうとめ}関係で犬猿の仲だった息子の嫁・お路^{みち}が口述^{こうじゆつ}筆記^{ひっき}を担当し、舅の馬琴と一緒にいる機会が多くなり、やきもち焼きの「お百」がそれに耐えられない状況になってしまうのです～

しかし、「お百・最悪の悪妻」論について、最近出版された書籍では、それは馬琴が他人へのお世辞のつもりで「うちの悪妻が～」といていたのが「悪妻」論の始まりではないか～と書かれていたのを見つけました。

そして、馬琴・お百・息子・お路は4人が仲良く合葬墓に入っているのですし、越谷に関係のある女性に「悪人なし」ということにしておきましょう。

馬琴と越谷に関係があることが、もう一つあります。

馬琴が、俳句を越谷^{こしがやごさん}吾山という越谷出身の俳人に習っていたのです。もともと、馬琴の兄が習いに行っていた宗匠。そして、日本で初めての方言辞典を刊行したヒトでした。いまでも、大学の方言学の講義は「吾山の方言学」から始まるのです。



越谷吾山

吾山・享保2(1717)～天明7(1788)

残念なことは、馬琴の代表作・里見八犬伝(98巻・106冊)は、蔦重逝去後の作で、馬琴畢生の名作に大・蔦重さんが全く関係がなかったことです。

とうしゅうさいしやく
「東洲斎写楽」は.....

蔦屋重三郎は東洲斎写楽(実は能役者・斎藤十郎兵衛)の絵をいつ、どういう状況で見たのでしょうか。タイミングとしては、蔦重と歌麿との間が少し冷えたときで、蔦重が新しい作者を探していた時期のようです。

写楽が見せた絵というのはたぶん、墨書きのデッサンのようなものだったのでしょう。暇つぶしに描いた絵だと想像します。ほかの絵描きとはまったく違う絵で、少しは自信もあったのか、一度、専門家に見てもらおうとしたのかと思います。本人が蔦重の店に持ち込んだのか、だれか、おせっかい焼きが蔦重に持ち込んだのか。

勘の鋭い蔦重は、一見しただけで、その絵に惚れ込んだのでしょう。

そして、10ヵ月間に約140点の売り出しは大当たりでしたが、その後、

写楽はどういうわけか、筆を折ってしまったのです。

その原因は不明で、アイディア第一の写楽のアイディアが枯れてしまったのか。たしかに、あの方の写楽の絵は、ちょっと元気がなくなって、素人の眼にもちょっと困ったなあと思われる位の出来なのです。

別の意見もあります。もともと、阿波藩の能役者である写楽が、殿様が参勤交代で阿波に帰っている間だけは筆を取ったが、殿ご帰



市川鯉藏の竹村定之進 寛政6 東博蔵

還のあとは、「浮世絵を描くことなどは武士のやることではない」という武士の常識に背くものとして、写楽が遠慮したのか、させられたのか、それで筆を折ったのだという推察です。推察は可能でも、結論は不明です。

登場、退場の経緯もわからず、登場期間も短かったため、写楽とはいったい誰なのか、江戸時代の考証家・斎藤^{げっしん}月岑が「増補浮世絵類考」に「俗称斎藤十郎兵衛、八丁堀に住す。阿波^{あわ}候の能役者也」と書かれているだけが手がかりでした。これは素人ではなかろうと、候補者は歌麿、北斎、^{おうきよ}応挙、^{とよくに}豊国、ついには薦重まで約 50 人ほど出てきましたが、よく似た絵を描くから～というのでは写楽を絞り切ることはできませんでした。

その後、能役者の名簿とか、阿波・蜂須賀家の古文書などの探索が行われ、徳島・写楽の会が越谷市^{ほろこうじ}の法光寺で斎藤十郎兵衛の過去帳を見つけたのです。

過去帳には「八丁堀地蔵橋 ^{あしゅうどのおんうち} 阿洲殿御内 齋
藤十良（郎）兵衛 文政3年3月7日死去、
千住で火葬」とありました。

法光寺は築地の本願寺の関係寺院で、火災
のため、築地から越谷へ移ってこられました。
十郎兵衛の墓はありませんが、記念碑が立て
られ、写楽の会と蜂須賀桜と武家屋敷の会の
連名で阿波ゆかりの蜂須賀桜が植えられてい



ます。写楽 中野三敏著 中央公論新社刊 2007 から
ます。蜂須賀桜は早咲きですので、関東の河津桜の満開に合わせてお出かけください

現在は、写楽＝齋藤十郎兵衛説で間違いないとされてきて、「別人説は沈
静化している」と、東京国立博物館特任研究員で大分県立美術館長の^{たざわひろ}田沢裕
^{よし}賀さんもおっしゃっています。（大河ドラマ 歴史ハンドブック「べらぼう
～蔦重栄華の夢噺 蔦屋重三郎とその時代」より NHK 出版刊 2025.1）

写楽と越谷のご縁はもっとあります。八丁堀の写楽（齋藤十郎兵衛）家の
隣に住んでいたのが国学者・村田^{はるみ}春海。そこに越谷・^{おんま}恩間の国学者・渡辺^{こう}荒
^{よう}陽の娘・^{たせこ}多勢子が養女にゆきました。多勢子は江戸に住む大名の奥方や姫君
に歌道や古典文学を教え、「都下に一人の女あり」と称される^{さいじょ}才女でした。
そして、自分が養父・春海から受け継いだ村田国学の門人を育てたのです。
多勢子は生涯独身で、自分も養子を迎えたのが隣家・十郎兵衛の息子。のち
に村田^{はるみち}春路の名前で学者になりました。越谷のヒトが写楽の隣に住み、写楽
の息子を養子にしたのです。素晴らしい関係があったといっているいいですね。

薦重・馬琴・写楽の比較略年表

薦屋重三郎

曲亭馬琴

東洲斎写楽

○寛延 3 (1750) 薦重出生

○宝暦 6 (1756) 両親離婚

○宝暦 11 (1761) 写楽出生

○明和 4 (1767) 馬琴出生

○天明 3 (1783) 吉原細見独占・日本橋通油町進出

○天明 7 (1788) 俳句師匠・吾山逝去

○寛政 3 (1791) 身代半減処罰

○寛政 4 (1792) 馬琴を雇用→ →※

○寛政 6～7 (1794～5) 写楽浮世絵発売→ →※

○寛政 9 (1797) 脚気で逝去<48 歳>

○文化 11 (1814) 八犬伝刊行開始

○文政 3 (1820) 写楽逝去<58 歳>

○嘉永 1 (1848) 馬琴逝去<82 歳>

薦重・馬琴・写楽 こぼれ話

○薦重の最後の言葉

「自分の人生は終わったが、まだ命の幕引きを告げる拍子木が鳴らない。

「遅いなあ」と笑いながら言って、あとは口を開かず不帰の人となりました。

○蔦重の天敵も、越谷とは関係あり

蔦重の時代は、まさに老中首座・松平定信の「寛政の改革」(1787～1793)の時代でした。書物出版取締令が発布されたりして、蔦重自ら、寛政 3 年(1791)には重過料として財産の半分以上を没収されています。

しかし、定信は領地が白河なので、その往復に日光街道を使い、間久里で名物の鰻を何回も賞味しています。また、彼の書いた扁額^{へんがく}が大相模・大聖寺の山門に掲げられています。天敵・定信も越谷といろいろと関係あるのです。

○現在の「TUTAYA」は、蔦屋とは無関係

「TUTAYA」は本体創業者の祖父の屋号「蔦屋」からで、関係はないようです。江戸時代の「蔦屋」にあやかろうとされているようですが～

参 考 書

- ・歴史人 令和 7 年 2 月号 ABC アーク刊
- ・TJ MOOK大河ドラマ べらぼう～蔦屋栄華乃夢噺～宝島社刊 2025
- ・NHK大河ドラマ 歴史ハンドブック べらぼう～蔦屋栄華乃夢噺～NHK 出版刊 2025
- ・蔦屋重三郎 松木 寛著 日本経済新聞社刊 S63
- ・馬琴綺伝 小谷野敦著 河出書房新社刊 2014
- ・写楽 中野三敏著 中公新書 中央公論新社刊 2007
- ・能役者・写楽 内田千鶴子著 三一書房刊 1999

蔦屋重三郎は「箱入娘面屋人魚」、曲亭馬琴は「国文学名家肖像集」、越谷吾山は「雪を花」の肖像を使用